

# 大学時報

UNIVERSITY CURRENT REVIEW

No.383

2018

11

隔月刊



2018年4月グランドオープンの新教室棟「慶聞館」(中央) (大谷大学)

## 特集 大学は自然災害とどう向き合うか

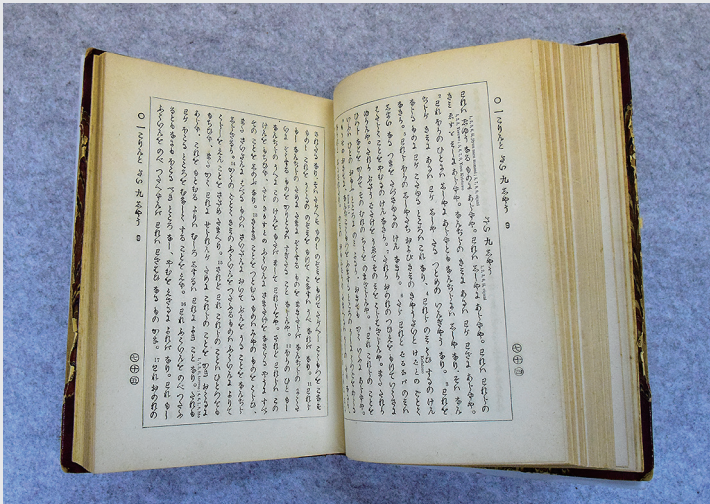
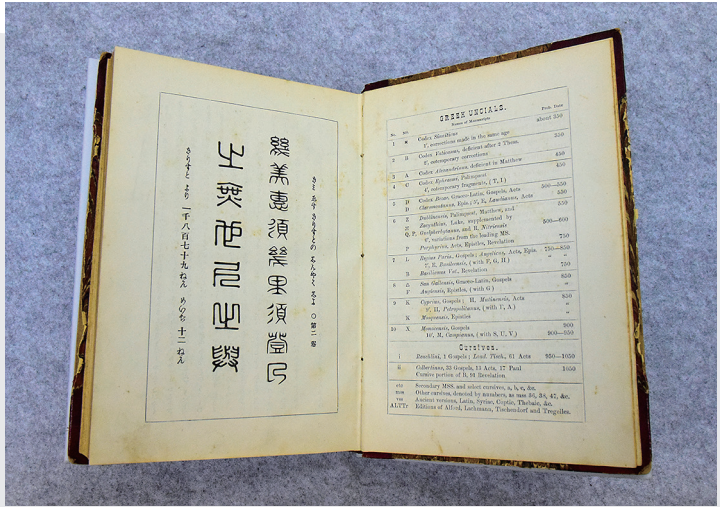
座談会 地方自治体と大学の就職に関する協定締結による  
地域活性化への期待

小特集 魅力ある大学院をどうつくるか

明日への試み 跡見学園女子大学 わが大学史の一場面 芝浦工業大学  
加盟校の幸福度ランキングアップ

上智学院／共立女子学園／創価大学  
クローズアップ・インタビュー 株式会社 石村萬盛堂 専務 石村 一枝さん

日本私立大学連盟













【写真左】1913年から長年にわたり本学をみつめてきた尋源館（じんげんかん）【写真右】2018年4月にグランドオープンした慶間館（きょうもんかん）  
※国登録有形文化財

# Be Real 寄りそう知性

2018年4月、社会学部、教育学部を新設。自分自身と向きあひながら文学、社会学、教育学の視点から学ぶことで、他者や社会とともに生きることのできる人物を育てます。



## 2018年4月より “新しい”大谷大学がスタート

大谷大学は、1665年に京都の東本願寺の研究教育機関として設置された施設をルーツとする仏教系の大学です。「自己の信念の確立」を建学の理念とし、仏教思想を学ぶ「人間学」を教育・研究の根幹としています。

本学は、長い期間、文学部単科でしたが、2018年4月に社会学部、教育学部を新設し、3学部体制に移行しました。

### グラウンドデザインに掲げた教育力向上

110周年を迎えた2011年の開学記念式典において、本学の理念・使命に基づき、2012年度から2021年度までの10年間のビジョン・目的及び行動計画を「グラウンドデザイン」として策定しました。

本計画は、「仏教精神に基づき、社会を主体的に生きることのできる人物の育成」とのビジョンに立ち返り、具体的な教育・研究・学生支援・社会貢献・管理運営についての方針と目標を定めた内容となっています。

今般の社会学部・教育学部新設はグラウンドデザインに掲げられた教育力向上の一環でもあり、前身の学科の実績を引き継ぎつつ、本学の精神を教育活動の中でさらに積極的に展開することを実現する改革です。

### 社会学部の学系

これまで、文学部に設置されていた社会学科と人文学報学科を改組し、社会学部として「現代社会学科」「コミュニケーションデザイン学科」の2学科を設けました。

これまで、社会学部社会学科においては社会学の教員を中心に、学生と地域に出掛けて活動する学びを展開していましたが、社会学部では、さらにそれを発展させ、机上の学習だけでなく、1年次から実際に地域に入って、住民の方と連携しながら、現場での学習に積極的に取り組んでいきます。

例えば、大学と地域をつなぐ活動拠点「地域連携室（通称：コミュ・ラボ）」を2015年4月に立ち上げましたが、現在も京都市の過疎地における地域活性化のための活動や、祇園祭のゴミ分別活動、「コミュ・ライゾ」の企画・取材、東北での被災者復興支援活動のプロジェクトなどを行っています。



大学と地域をつなぐ活動拠点  
「地域連携室（通称/コミュ・ラボ）」の取り組み

### 教育学部の学系

教育学部は、文学部教育・心理学科を改組し「初等教育コース」「幼児教育コース」の2コースを設けました。

「初等教育コース」では小学校教諭一種免許状を取得でき、授業力や指導力を育てる少人数制教育を行います。

従来、教育心理学科で取り組んでいたイベント「おたにキッズキャンパス」を引き継ぎ、授業として位置づけて実施します。



子どもたちと交流し、現場に即した実践力を磨く  
「おたにキッズキャンパス」

社会的課題の担い手、社会的に弱い立場に置かれた方々の環境回復に関心を持った教職員がプロジェクトの中心として活動しており、仏教精神にもとづく本学らしい社会学の活動と言えます。また、高齢化・過疎化の問題をもつ地域の寺院における将来の担い手たちにも、コミュ・ラボの活動を通じて学んでもらいたいと思います。

「おたにキッズキャンパス」は、将来小学校の教員を目指す学生が中心となり、地域の小学生以下の子どもを対象に、さまざまな体験イベントを行います。理科実験や図画工作などを通して、子どもたちと実際に交流することで、現場に即した実践力を磨いていきます。



「幼児教育コース」では幼稚園教諭一種免許状と保育士の資格、発達にまつまぬきのある子どもに寄りそえる保育心理士（二種）の資格も取得できるよう、幼児教育や保育の現場と連携した学びを展開していきます。

近隣の子どもたちと、歌や運動遊びを行いながらの交流や、0歳児と保護者を対象とした地域の子育て支援事業なども開催しています。

両コースともに、このような取り組みを積み重ね、現場と連携した学びを展開し、子どもに寄りそい、ともに成長ができる教諭・保育者を養成します。

### 文学部の学びの強化

文学部は、真宗学科・仏教学科・哲学科・歴史学科・文学科・国際文化学科の6学科体制となりました。哲学科には「心理学・人間関係コース」、歴史学科には「世界史コース」、文学科には「現代文芸コース」、国際文化学科には「英語コミュニケーションコース」などが新たに設けられ、それぞれ基礎からはじめ、各専門分野に特化した学びを深めるカリキュラムを用意しました。

なお、真宗学科はこれら文学部の学科に先駆けて、2016年4月から新コースをスタートさせています。親鸞の著作や文献から思想を探究する「思想探究コース」、現代社会の様々な現場と深く関わりながら思索する「現代臨床コース」、仏教に関心を持つ留学生の受け入れと海外への卒業生の輩出を自

指した「国際コース」の3コースがあります。

特に「現代臨床コース」を設けたのは、これまで行ってきた大学での仏教教育・研究に、反省すべき点があるとの認識があったからであり、このコースでは、現代社会の中で苦しみ悩む人のそばに赴き、実際に現場で思索する学修の経験が必須であると考えています。真宗学を学んだ者が将来の寺院に関わる、もしくは企業や行政機関などで働く場合にも、他者の苦しみに寄りそう中で社会の形成を目指し、地域づくりを試みる人間の存在が大切になるでしょう。臨床的学修に基づく人物の育成が、これからの真宗学でも重要な課題になると考えています。



### 全学的な取り組み

本学では、作家や新聞記者、雑誌編集者などを講師に招き、実際の仕事についてレクチャーを行う「文藝塾講義」と、小説の創作を目指し、表現力や構成力を磨く「文藝塾実践演習」の2科目を設けていますが、そのカリキュラムの基となる「文藝塾」を2018年4月にリニューアルオープンしました。講義や演習の聴講者でなくとも原則として自由に利用できます。書くこと、読むことに積極的に取り組む学生を支援しています。



慶館1階にある「文藝塾」

### 学生が主体的に学ぶための環境整備

2018年4月にランドオープンした新教室棟「慶館」（きょうもんかん）は、誰にとっても使いやすい「ユニバーサルデザイン」を念頭に、館内各所に自然エネルギーを活用するなど、環境や省エネに配慮しています。

1階中央部には、学生ロビー「ミナイル・プラザ」を配置し、学生のさまざまな学びや活動をサポートする多目的スペースとして利用できます。そのまわりには、学生支援部事務室（学生支援課・教務課・キャリアセンター）をはじめ、学習支援室（LEARNING SQUARE）、語学学習支援室（GLOBAL SQUARE）、文藝塾などの学生生活のサポートセンターやカフェを設置しています。また、2〜5階には、ガラス張

りて明るく開放的な教室が並び、情報系教室や教員の個人研究室も配置しています。学生が自由に利用できるマルチスペース（マルチ・サブゼミ・コモ）なども多数備えており、学びに応じてさまざまな使い分けが可能です。

←慶館1階中央部に配置する学生ロビー「ミナイル・プラザ」（愛称）



慶館4階 廊下スペース→新教室棟「慶館」の建築計画にあたり伐採した樹木もベンチなどに利活用



Be Real 寄りそう知性

[www.otani.ac.jp](http://www.otani.ac.jp)



# 大谷大学

## ◆ 文学部

真宗学科 仏教学科 哲学科  
歴史学科 文学科 国際文化学科

## ◆ 社会学部 ※2018年4月新設

現代社会学科  
コミュニティデザイン学科  
○地域政策学コース ○社会福祉学コース

## ◆ 教育学部 ※2018年4月新設

教育学科  
○初等教育コース ○幼児教育コース



# 大学時報

No.383

2018.11



## Be Real 寄りそう知性

木越 康 ● 大谷大学学長

大谷大学は2018年4月に、文学部に加え社会学部、教育学部を新設し、3学部体制がスタート。新体制に合わせて、大学を象徴するメッセージ「Be Real 寄りそう知性」を発表した。

「Real」には、目の前の「現実」と、仏教でいう「真実」の二つの意味を込め、真実を求めながら現実に向き合う姿勢を表している。そして「寄りそう知性」。これは仏教の「慈悲」を意味するが、「Be Real」の学びの先にある〈真の知性〉を表す。

学生諸君には、あるべき人間と社会とを創造していく人に成長してほしいと願っている。

# 数と種類が多様化する日本の大学の行方

Oussouby SACKO ● 京都精華大学学長

## はじめに

私が学長に着任したのは2018年4月のことである。着任以降、他大学の学長と一緒に出席している会議を通じて日本の大学が直面しているさまざまな問題を知り、また大学変革を求める文部科学省をはじめとするさまざまな機関の文書にも多く目を通すことになった。大学経営の観点から見ても、多くの大学と受験産業界が最も気にしているのは学生数の確保や卒業時の就職率の問題である。いくつかの会議に出席するたびに18歳人口の減少が話題に上がり、ときには私だけが見当違いをしているのかと思われるほどである。むしろ私にとって気になるのは、数百年後の世界を見据えたときに、なお大学進学が必要とされるのか、あるいは社会における大学の役

割そのものが変わるべきなのかといったことだからである。

日本の大学教育をみると、知性を重んじる欧州の大学をモデルにしているようにもみえるが、教育の内容と管理についてのみいえば、米国の大学に似通った部分が多いように思われる。古代から周辺文明の影響を受けた日本の教育は、絶えず外国を意識しながらも独自性を育んだ時代もあった。身分制度による教育格差の中でも庶民を対象とした寺子屋が充実にしていたように、日本は独自の教育哲学を形成し、それが今日の教育の方向性へと結実していったと考えられる。明治初期に制定された学制に基づいて大学が設置されてからは、近代国家の建設を目標として、国民の教育方針が国家の管理下に置かれることとなった。以降、社会変動を反映して教育内容もま

た変化を続けるとともに、一方では個人が教育を受ける権利を保証しつつも、他方では知性を重んじることが中核に置かれていない大学も増えてきたように思われる。国外のさまざまな大学を見渡したとき、そうした思いはますます強くなり、次第に大学のあり方について考える機会が増えていった。

そもそも、教育の権利とはよく耳にする言葉ではあるが、その教育とは何なのかという議論はあまりされていないのではないか。教育の目的の一つは、個々の人材が人間社会の中で生存できるように、同時にそれらの人材が社会の一員として期待される役割を果たせるように、社会が決定した体系的な方法で育成することにある。つまり、本来の意味で「教育の権利」を保証するのであれば、どういった教育を受けたいのかを個々が選択できるようにすることが肝要であるにもかかわらず、教育全体の枠組みは既に社会や国家によって決定されているのである。

これまでも、教育内容は社会がどのような人材を求めているかに応じて整備されてきた。エミール・デュルケームは、『社会学的方法の諸ルール』（1895）において社会や道徳を語る中で、子どもの教

育にも言及している。デュルケームによれば、教育を通じて子どもは自発的に社会の諸ルールを学習するというよりも、むしろ教育は社会の諸ルールを子どもたちに押しつけている。教育全般にわたって、どのように見て、感じて、行動すべきかが子どもたちに教え込まれ、人生の最初の瞬間から定期的に食べることに、飲むことに、眠ることが強制されることは明らかである。このようにして、人間は社会の中で生きていくための道徳を身に付け、社会から期待される役割を担おうとする——と。

教育の権利と選択が社会において広く、かつ当然のことと認められるようになった今日、子どもがどのように教育され、どのような道を歩むのかを今一度、考え直す必要がある。国や社会の限られた枠が意味を失っていくグローバル化した時代にあつては、これまでのフレーム化された教育を超えて個々の教育の権利を保障する必要があるのではないか。

## 1 私の経験から

### ——エリート教育からの脱出

私は西アフリカ、元フランス植民地であるマリ共

和国（以下、マリ）で生まれ、高校卒業までの期間をマリで過ごした。マリの教育課程はフランスの影響が大きく、ときにアングロサクソン型の教育とは真逆のこともある。アングロサクソン型の教育では、子どもは幼い頃から行動を制限されることなく、自主性や感受性を高めるために整えられた環境でさまざまなリソースが提供されることにより、自分自身が進みたい進路を選択していくことが求められる。

その過程では、子どもと学校教員との関係、社会との関係も大人同士のものと等しく、また幸福と成功を混同しないよう教えられる。一方、私が育ったフランス型の教育では、家庭と同様に学校でも道徳が教え込まれ、他者との関係、社会との関係は教育を通して身に付けていくものとみなされている。

私は幼い頃から、理系志向でありながら読書が好きで、読む本にも特に系統がなく、それこそ手当たり次第であった。学校と家庭や地域の教育がきわめて現実的で、しかもその中で期待された役割が要求される一方で、本の世界は私が唯一夢を見られる場所だった。小説であれば、推理小説、歴史小説、アフリカ文学、哲学書など。自分で選んだ本がほとん

どだったため充実感を得ることが多く、本を読めば読むほど好奇心もますます旺盛になっていった。本の世界を現実世界とリンクさせようとは考えたこともなかった。できるだけ現実的なフランス型教育から逃避し、ルールもなく、終わりも始まりもない世界と触れ合うことにしていたのである。

一方、学校の教育は、特に発展途上国においては、国の将来を背負う身のふり方、そのために必要な知識の蓄え方や使い方など、いわゆるエリート教育が軸になっていた。教育の目的は公的人間の育成、あるいは社会性を備えた人間を育てることにあつた。そこには人間が本来持つべき創造性はなく、人間の身体だけでなく精神までが社会によって整えられていく傾向にある。コミュニケーションの一員として与えられた役割を果たすことのできる人材になるための職業訓練のような教育だった。こうした教育では、社会における自分の地位や、社会が想定する人間像と人間性を自覚するための通過儀礼としての側面が主軸にならざるをえない。

今日の日本の義務教育は、この創造性を欠いた現実的な教育が多くを占めているように見える。他方、

大学ではほどよい自由が認められ、管理が軸にありながらも学生の主体性が認められる場所となっている。学生は自由時間を多く持ち、情報を自分で選択しつつ知識を蓄え、自由に行動できるからである。

この自由な時間の位置付けはさまざまな文化圏で異なっている。先述のアングロサクソン型教育では、暗記よりも経験によって情報を手に入れ、その情報を各人で知識化していくことが重視される。そうした教育の基礎となるのは、ギリシャのポリスの教育を起源とするリベラルアーツの精神と共通するものである。他方、私が受けてきたエリート教育を基本とする教育では、理想的な社会を形成するために一部の人々に限られた知識しか提供されていないような気がしたものである。

さて、エリート教育を否定しながらもアングロサクソン型でもない日本の教育は、どこに向かおうとしているのか。この疑問が昨今、よく自分の中で湧いてくるようになった。リベラルアーツの伝統を引き継いで自由に考えることを重視する大学と、社会が求める専門的なスキルを修得させようとする就労教育的な大学との融合の可能性を探る必要がある

のだろうか。この根本的な問いに対する答えを私自身も持ち合わせてはいない。そもそも大学とは何なのか、今や見失われているのではないか。

## 2 大学生活と教育の区別化

### ——大学のいらぬ社会構造

日本では、大学は教育の過程の中にあるステージの一つとみなされている。大学に進学すべきと考える人は多いものの、多くの若者は何を求めて進学するのか、大学とは何をすべきところなのかを理解しないまま進学してしまう。唯一の、そして日本の社会構造の現実を考えるなら仕方ない言い訳が、大卒だと就職に有利だというものである。学生との会話でも、よく耳にする。

こうした風潮は大学の規模や偏差値とは関係なく、どの大学にも存在している現実である。大学としても、入学してくる学生に何らかの目的意識を与えなければならぬので、そもそも大学とはどのような場所なのかを新入生に説明し始めるわけである。そして、この時点で、個々が自由に思考し、行動するという選択肢は奪われてしまうのだ。さらには4

年間の「充実」したカリキュラムを設定したところで、ほとんどの道筋は引かれてしまうのである。結果的に、自分で自由にものを考え行動するということは大学の次のステージに先送りされてしまい、若者の成長を遅らせてしまうことになる。もちろん、大学の次のステージでも同じ先送りが待っている。

大学は高校の延長でも就職の前段階でもないことを理解する必要がある。大学は、個々が自由に経験と知識を獲得するために設けられた場所であり、本人が納得するまでそこにいさせてあげるべきである。日本社会における大学の位置付けは、大学の存在意義を狭めてしまっている。

繰り返して言えば、大学とは経験と知識を自由に獲得する場所であり、そこを出発点として、個々の学生がどのような人生を歩みたいか考える機会を与えてあげる場所である。大学が生まれた背景、つまり十二、三世紀のヨーロッパを振り返ってみると、大学とは学生と教師の組合と自治によって生まれた共同体であり、現実の社会とは離れた立場から、社会の圧力を受けないところで、現実を客観的に検討できるところであったといわれている。しかし、そ

の場所があまりにも自由になりすぎた結果、さらにその社会的・政治的な影響が大きくなりすぎた結果、大学を壊そうとする政治の側からの動きが生じた。フランスをはじめとする欧州における大学の見直しの中では、いかに大学を管理するかが重要なポイントになった。

今日、大学は自らの存続のために社会を味方につけなければならぬという強迫観念に過度にとりつかれている。とはいえ、今日の大きな社会変動の時代にあつて、大学はいったん原点に立ち返り、むしろ社会のあるべき姿を自由に思い描ける場所になる必要があるのではないだろうか。

## まとめ

日本の大学の行方という題でこの稿を展開してきたが、これほど人口当たりの大学数や種類、それも私立大学が多い国は日本以外には例がない。さまざまに大学が数多くあることによって、確かに量的には教育の多様性を担保できるものの、自分の進学先を選択する若者の立場になって考えてみれば、そこにはつきりとした質の違いがない限りは、むしろ混



乱を助長するだけのようにも思われる。これからの日本では、それぞれの大学が自らの位置付けとあり方を再考し、発信していく必要がある、そうすることによってこそ、グローバル化する世界の中にあつて存在意義を保つことができると考える。

